

橘社長の個人秘書

C h i s a t o & Y u s h i

楨原まき

Maki Makibara

Eternity



エタニティ文庫

「ちさ、俺達……友達に戻らないか？」

自分をうしろから抱きしめながら切り出した勝の言葉に、千里の胸は跳ね上がった。何度か目をばちくりさせ、ゆっくりと振り返る。その動きに合わせて、顎のラインで切り揃えた栗毛のボブが小さく揺れた。

見慣れた勝の部屋のいたるところにある自分の名残。彼と一緒に買った観葉植物が、心配そうにこちらを見ている気がした。

「え？ 何で？」

それは純粹な疑問だった。勝とは付き合い始めて六年になる。六年だ。決して短い時間ではないはず。

六年前、葉鳥千里は大手広告代理店、白東エージェンシーに就職した。そこで最初に携わったプロジェクトのチームの中に、二歳年上の彼がいたのだ。共にデザイナーとして切磋琢磨していく中で、少しずつ親しくなり、何本目の仕事を迎える頃には、自然

1 フラれました

と付き合うことになっていった。

社内でも公認の仲。喧嘩けんかをしたこともあつたけれど、六年という長い歳月を過ごし、気持ちは通じ合っているものだと思つていた。千里はそんな自分の甘い考えが歯がゆく唇を噛む。

「ちさのことは好きなんだ。とても大事だし……可愛いと思つてるんだけど、けび——」
 何とも歯切れの悪い勝の言い分。別れを切り出しておきながら、自分を腕の中から離さない男に対して、千里の頭の中にはたたくさんの疑問符が浮かんでいった。

——なぜ抱きしめながら、こんなことを言うのだろうか、彼は。

「正直、女として見れないんだ。妹とか、ベツト感覚？ 悪い……」

——女として見れない。

脳天を鈍器でぶちのめされるほどの衝撃というのはこういうことだろうか、千里は身体力が抜けていくのを感じた。

怒りはない。ただシヨックだった。女として見れないと言われたことが。

「それって、私にときめかないってこと？」

「そう、なるかな……でも、何も変わらないと思うんだ。俺達、もう四年もセックススレさだし。最近は特に、彼氏彼女っていうよりも、友達みたいな感覚だった気がするし」
 確かに彼の言う通り、この四年、二人の間に身体の関係はなかった。

もともと勝は淡白な男で、熱烈に燃え上がるようなセックスをするわけでもなく、六年の交際期間中、身体を重ねていたのは最初の二年だけ。それも二年目など片手で数えるほど……

最近ではキスもろくにしていなかった。頬に触れる軽いキスだけ。

会社帰りに手を繋いで、一緒にスーパーに寄って買い物をして、一緒に晩ご飯を作つて、一緒に食べる。お互いのアパートにはそれぞれの荷物が置いてあつたから、どちらのアパートに泊まっても何も不都合はなかった。同じ布団で抱き合つて眠り、そしてまた一緒に出勤する。そんな二人の六年間。

甘い愛の言葉を囁ささかれることがなくても、身体を重ねることがなくても、「ちさ」と自分を呼ぶ勝の声はいつも優しく、それだけで安心して彼の腕に飛び込んでいたというのに。

「何も変わらないの？」

「変わらない。こんなこと言い出しといて何なんだけど、ちさのことは好きなんだ。他の女に惚れたわけでもないし……だけど、ちさを抱こうって気にならないんだ。そして、これって付き合ってるって言えるのかって疑問に思っちゃって。一度思っちゃったら、もうその考えが頭から離れなくて」

ポロツと千里の目から零こぼれた涙を、勝は何の躊躇ためらいもなく唇くちで掬すくう。瞼まぶたに何度か落ち

てくるキスは、今までと同じ軽いもの。自分を抱く腕の力は弱まらないのに、彼の口から出る言葉は容赦無く胸をえぐった。

「まーくんは、友達にキスするの?」

「わからない。ちさ以外に女友達っていないから」

そう言われて、千里は自分が勝の中ではすでに、「女友達」というポジションに置かれていることを痛感した。さらに彼は、千里が自分を「男友達」というポジションに置くことを望んでいるのだ。

「私も男友達ってまーくん以外にいないからわからないよ」

チクチクする胸の痛みを抱えながら、千里は勝を「男友達」と呼んでみた。

彼、谷村勝は千里の初めての彼氏だった。専門学校を卒業して、二十歳の頃から六年も付き合ってきたから、彼以外の男を知らない。職場に仲のいい同僚はいるが、休日と一緒に過ごすほどの間柄ではない。休日はいつも勝と一緒にだった。似た者同士、気が合っていたのだ。

「ちさと遊ぶのは楽しいし、ちさと連絡取らないとか考えられない。ただ、ちさと結婚して子供作ってとか、先が想像できないんだ。それなのに俺がちさを引き留めていていいのかわからない。正直ダメなんじゃないかって、思う」

六年という長い付き合いの中で、特に大きな喧嘩もなく、二人が仲よく穏やかな関係

を築いていることが職場でも知られていたから、周りの男達は千里のことを「売却済」と認識し、手を出すこともなかった。それほどに二人の関係は——身体の関係がないことを除けば——良好だったのだ。

「えっちしないのに、赤ちゃんでできるわけないもんね」

「そうなんだよな……」

「まーくんは私とえっちしてないの不満だった?」

「不満とかない。俺、淡泊だし、ちさを抱っこして寝るだけで満足だった。ちさ可愛いし。ちさは?」

「不満とか考えたこともなかった。まーくんと一緒にいるのが楽しかったから」

「俺も楽しかったよ。これからも一緒に遊ぼう? ダーツもビリヤードも美術館巡りも、ちさと行くよ。映画も一緒に観ればいいし、全部今まで通りだ」

勝がくしゃくしゃと千里の頭を撫でる。

「お互いに恋人ができたら?」

「片方が付き合ってるなら、二人で会うのはよくないかもな。でもお互いに恋人ができたら、ダブルデートとかいいかも」

——簡単に言ってくれちゃって。

千里は初めて勝を酷い男だと思った。千里が勝をどう思っているのかを、彼は聞か

いのだから。

千里は身体の関係がなくとも、何の不满も感じないほど、勝のことが好きだったのに。彼に今までの付き合いまでも友達としての関係だったと言われ、心が折れてしまった。けれど勝の言う通りなのかもしれない。すぎるほど健全な付き合いの中に、友達以上のものはなかった。本当の意味で勝が彼氏だったのは、最初の二年間だけだったのだ、きつと。

千里は迷いを振り切るようにポケットから携帯を取り出すと、勝のアドレスを表示した。「彼氏」と特別に分類されたそれを「男友達」に書き替える。

「彼氏」の文字は消えたが、「男友達」のグループ内に表示されるのは相変わらず、勝一人。「ホントだ。何も変わらないね。私の携帯に入っている男の人のアドレスはまーくんだけだよ」

「俺も同じ。彼女じゃなくても、ちさは特別」

勝は、千里の胸元で交差した腕を、一瞬強めてからサッと離れた。

「ちさ、スーパーに買い物に行こうか。今日はシチューにしないか？」

「いいね。シチューにはパンも買わなきゃね」

「ブロックチーズも忘れずに？」

「アルプスの少女ハイジごっこ！」

千里と勝は、息の合った掛け合いのあと、せーので互いの両手をパンと合わせて立ち上がった。

「ちさ好きだよ。友達でいような！」

「私もまーくん大好き。ずっと友達ね！」

勝は友達。彼とはこれからも変わらない関係。ずっと友達。

二人は一緒にスーパーに向かった。

しかし何も変わらないと言った直後から、千里が自ら勝の手を取ることはなかった。それが、二人の関係の終焉を物語っていた。

「葉ちゃん、谷村と喧嘩したの？」

翌月曜日、いつも一緒に千里と勝が別々に出勤するという異例の事態に、職場は少々ざわついていた。千里はさっそく、嗜好きのお姉さま方に捕らえられ、ランチという名の拉致に遭った。

「別れたんです。まーくんと」

「え!? 別れた? 何で? 二人は結婚するんじゃないの!？」

あんぐりと口を開けたお姉さま方の表情に、千里は苦笑いした。

そもそも勝との間に、結婚の話が上ったことなど一度もない。いや、別れた日にした

か。そして「考えられない」とバツサリ言われてしまったのだ。

周りが勝手に想像して、決めつけていただけ。御多分に洩れず、千里も心のどこかで決めつけていたのかもしれない。自分は勝と結婚するのだと。

「ちさと結婚して子供作ってとか考えられない、ってハッキリ言われちゃいました」

「谷村サイテー！ 六年だよ？ 二十から二十六っていう女の華の時期を喰つといてそりゃないわ」

ズキンと千里の胸が痛む。勝を悪く言われるのは嫌だった。だって彼は大事な「友達」なのだから。

「喰われてないですよー。まーくんとはずっと、なかったですし」

「へ？ なかった……ってずっと、その、——レスだったってこと？」

「そうです。もう四年くらい。だから、フラれちゃっても仕方ないんです」

お姉さま方の、あれだけ仲がよかったのに信じられないという呻きをよそに、千里は奢って貰ったバナナパフェにスプーンを突き立てた。そう、仕方がないのだ、と自分に言い聞かせながら。

彼はもう千里にときめかない——ときめかない女はただの「友達」。

ランチを終えて職場に戻ると、ものすごく居心地が悪かった。勝は勝で、誰かに何か

言われたのか、ため息が多いし、自分に向けられる視線のすべてが、哀れみに満ちているようで、とても顔を上げていられない。社内恋愛のマイナス面を今、千里は猛烈に感じていた。

勝とは同じ部署で、案件によってはチームを一緒に組むことだってあるのだ。

「葉ちゃん、合コンしよっか！」

お姉さま方の気遣いに、千里が曖昧な笑みを浮かべると、勝が口を挟んできた。

「ちさが行くなら俺も行く。ちゃんと家まで送るから……」

「あんた馬鹿じゃないの!? 別れた男と一緒に合コン行く女が、どこの世界にいるのよ！」

勝は一瞬黙ったが、一度千里の方を見てからお姉さま方に視線を移した。

「俺とちさのことに口出ししないで貰えますかね？ あんたこそ、ちさの何を知ってるんですか？」

あまりにも堂々とした物言いに、お姉さま方がカチンときているのがわかる。

「あんた、いつまで彼氏面してんの!? 葉ちゃんフツたのあんたでしょ！」

「そうじゃなくて、ちさを心配してるだけです。知らないでしょうけど、ちさは——」

「まーくん！」

千里が強い口調で勝を制すると、彼はああ、と一つ零して頭を撫でてきた。

自分を見る彼の目は、以前と何の変わりもなく優しい。その手の温もりも変わらない。千里はそれがどうしようもなく苦しかった。

「別に一緒に合コンなんか行きませんよ。——ちさ、飲みに行くなら帰りに電話しな。迎えに行くから」

「そーゆーのが彼氏面だつて言ってるの！」

噛み付いてきたお姉さま方を勝は鼻で笑い、彼女達に視線を向けた。どちらかというど幼い顔立ちの彼だが、眼力は立派に男らしく鋭い。

「ちさに本気の男なら、ちさを昼間に口説きますよ。俺がそうだったようにね」

暗に、自分は本気だったという勝の言葉に、千里は身体を硬直させた。

ただ、本気で付き合っても将来が見えなかっただけ。遊びで六年も同じ時間を共に過ごしたわけではない、という彼の本心が見えたようで切なくなる。確かに彼には大事にされていたと、千里は振り返った。彼はいつだって側にいてくれた——

「じゃあさ——」

勝のうしろから響いた声に、皆一斉に注目した。先輩に当たる高木の声だった。

高木は制作部のツートップの一人で、とても面倒見がよく頼りになる兄貴分的な存在だ。制作部の面々は皆ひと通り、新人の頃に彼の世話になっている。千里や勝も例外ではない。

彼は椅子に深く座ったまま首のうしろで両手を組んで、純粹な疑問をぶつけてきた。

「葉鳥は谷村の何なわけ？ 別れたんだろ？ お前ら」

「別れたら一切接触しちゃダメなんですか？ 俺がちさを心配したらダメなんですか？

友達の間係でいたらダメなんですか？ そんなことないでしょう？」

「友達なわけ？」

「友達ですよ」

勝と高木のやり取りに千里はいたたまれなくなった。ただ勝と別れただけで、なぜこんな大事になってしまっているのだろう。その思いが彼女に深いため息をつかせる。

「えっと、そんなにまーくんに色々言わないでください。私たち何かゴタゴタして終わったわけじゃないですから。普通に仲いいですし」

千里が勝を擁護したこと、高木をはじめとした社員は、一気に気持ちの持って行き場がなくなつた。皆、この二人の恋を応援していたのだ。地味だがセンスのいい仕事をすると勝。制作部のマスコットの存在の千里。二人とも小柄なことから、弟、妹のように可愛がられていた。

いつも仲よく出勤する二人の姿を見守っていた社員一同は、そんな二人が特に理由もなく別れたのが、理解できない様子だった。

なぜなら勝の言動は友達の間を超えているし、千里も彼を庇っている。それは互いに

まだ想いを残しているからではないのか、と。

「ついかさ、仲いいなら別れる必要ないんじゃないの？」

それは誰もが抱いていた疑問。高木がそこに何の躊躇ためらいもなく斬り込んだ瞬間に、勝の顔がぐしゃりと歪ゆがんだ。

「俺にも色々思うところがあるんですよ!!」

足音を響かせながら制作部を出ていく勝の背中を、千里は追いかけることができなかつた。ガラス越しに見えた勝の表情は、明らかに苛立いらだっていた。

「葉鳥いー。谷村に少し冷静になる時間をやったらどうだ？ ああ調子じゃ、すぐにやり直したいって言い出すかもしれないぞ？」

無言で佇たぐむ千里の肩に、お姉さま方の手が温かく乗った。

「そーそー。高木先輩の言うとおり。谷村、まだ葉ちゃんのこと好きっぽいじゃん？ 未練タラタラ」

「めっちゃ彼氏面してるのに、自覚ないのかね、馬鹿谷村のヤツ」

「アレだよ。レスとか気にしちゃった繊細な男心なんじゃない？」

千里は否定も肯定もせずに、ただ曖昧な笑みを浮かべるしかなかつた。

たとえ彼の気持ち自分が自分にあつたとしても、それは友達以上のものではない。千里が付き合っていたと思っていた歳月を、彼は友達として過ごした期間だつたと言つたのだ

から。

六年も付き合つた上に別れて、今さら結婚話が持ち上がることなんて考えられない。

彼の優しさは千里が特別な友達ゆえ。「変わらない」と言つたその関係を保とうと、彼は自分を慮おもんぶてくれているにすぎないと、千里は認識していた。

「みんなー仕事しようよ。頼むよー。本当に頼みますよ……」

部長の力ない声が制作部に響いた。

2 この子、頂戴？

そんなこんなで約一週間後、千里は新規企画の打ち合わせのため、先輩ディレクターの青葉あおばと共に、大手外食企業のラウンマークベンライン本社を訪れていた。

青葉が数年前に新規開拓した同社との仕事は、毎年確かな実績を上げている。青葉は専属ディレクターとして、千里は今回担当するデザイナーとして、打ち合わせに同席することになっていた。

青葉は高木と同期で、白東エージェンシー制作部のトゥトップの片割れだ。かつては大勢の女性と浮名を流していた彼も数年前に結婚し、今ではすっかり落ち着いて二児の

父親となっている。出会って一年のスピード結婚だった。

「青葉さん、奥様と仲いいですか？」

「もちろん。ぞっこんラブですよ」

出会って一年で結婚した青葉。付き合ってから六年で破局した自分。この違いは一体何なのだろうかと、自分で聞いておきながら、千里のいたたまれない思いに拍車がかかった。

「葉鳥さん、晴れてフリーになったんだから、谷村よりイイ男が現れるかもしれませんよ」

「だといんですが……」

——女として見れない。

勝が放った一言は、依然千里の心に刺さったままだった。おそらく言った本人が思うよりも深く、深く——

「青葉さん、先日メールでお伝えした件なんですけれどね」

名刺交換をして席に着き、青葉とベンライン社の営業が話しているのを聞きながら、千里は彼が持ってきたファイルの中からメールをプリントしたものを取り出した。

青葉は千里から受け取ったプリントを相手に見せながら、話を進める。デザイナードである千里はまだ出番ではない。ディレクターと先方とで、ある程度話がまとまってから、イメージを統合して煮詰めていく。

千里は、先ほどからベンライン社の営業の隣で偉そうに足を組み、無言で二人のやり取りを見ている四十代ぐらいの男のことが気になって仕方がなかった。彼は千里からの名刺は受け取ったものの、自分の名刺は出さなかったため、千里はこの男が誰なのかからなない。

青葉は彼のことを知っているらしく、話は滞りなく進んでいく。千里はベンライン社の営業本部長か、その辺りの人間だろうと見当を付け、青葉達の話を適宜メモしていた。男がフンフンと青葉の話に頷きながら、時折自分の方を見ていることにも気付かず

に——

「——これを踏まえて、デザインのアタリを取らせます。葉鳥、どう？」

青葉は千里が話の途中で手を動かしているのを横目で見ていたらしく、彼女の手の中にあるクリップバインダーを覗き込んだ。

「はい。大枠ですが、こういうったものはいかがでしょうか。あと二パターンはご用意できます」

千里はラフ画を見せながら、先方の二人の反応を交互に見た。営業の方は「これいいですね。でも、せっかくだし別のパターンも見てみたいですよ」と手応えがあったが、偉そうにしている男は無言で千里を凝視してきた。

そして、初めて口を開いた。

「君はデザイナー？」

「えっ、はい。そうです……」

何か気に入らない点でもあったのだろうか、と千里は口元を引き締めた。ペンライン社は取引先の中でも指折りの大手だ。粗相があつてはいけない。そう思うと自然と身体に緊張が走る。

「——君、俺の個人秘書をやらないか？」

突然のことに千里は呆気あきけに取られ、手に持ったバインダーを落としそうになりながら、目の前の男を見つめた。

まだらに白髪が混じった髪を柔らかくうしろに撫で付け、太り過ぎとまではいかないが、かなり肩幅があつて肉付きがいい。口の悪い表現をするなら、ややデブ、メタボ。控えめにいえば、ぼつちやり。痩せれば悪くない、のかもしれない。目には威圧感がある。千里は男に言われた言葉の意味を理解すると、瞬時にものすごい勢いで首を横に振った。

「ど、どうして私に!? 私に秘書の経験はありません! 無理です!」

「なくていいよ、そんなもの。一般的な秘書業務は役員秘書がやる。君には違う仕事をやって貰いたいんだ」

男は上質なスーツの内ポケットから名刺入れを取り出すと、千里の前に一枚の名刺を

置いた。そこに書かれた名前に千里は息を呑む。

——ラウンマークベンライン社代表取締役社長・橘創史。

「橘さん、堂々とヘッドハンティングですか？」

「ああ。白東さんには悪いんだけどさ。この子、頂戴?」

青葉は「困りましたね」と言つて、頭を掻きながら椅子に深く座り背中を預けた。

「俺は聞かなかつたことにしますから、葉鳥と話してください。何でしたら席を外しましょうか?」

「そうしてくれるか」

青葉と営業が応接室を出ると、橘は表情を柔らかくし、組んでいた足を下ろした。ずっと身を乗り出し、千里をまっすぐ見つめてくる。

「突然で驚いたかもしれないが、悪い話じゃないと思う。どうだい? やってみないか?」

「えっと、具体的にはどういったお仕事でしょうか?」

千里は動揺しながらも橘の向かいに座り、彼の言う「個人秘書」の仕事について詳しく聞いてみることにした。聞かなければわからないし、断りようがない。

「俺の薬の管理と、打ち合わせの同伴。電話番。あと、少々の仕事のサポート。まあ簡単にいえば、付き人だよ、付き人。俺の側について、俺の世話をしてくれたい」

「……薬の管理……ですか?」

一番最初に出てきた仕事とも呼べないそれに、千里は眉を寄せる。そんなことのためにわざわざ秘書が必要なものだろうか。

「たくさんあつて飲み忘れるんだ、葉」

「あの……お身体を壊されてるんですか？」

橘は機嫌よさそうに笑いながら、革の名刺入れを開いたり閉じたりしていた手を止めた。

「心配してくれるんだ？ いいね。そういうのいいね。今、給料いくら貰ってるの？」

「に、二十四万とちよつとです」

「ふん。なら月に五十万出す。俺の個人秘書をやらないか？」

——怪しい！ 怪しすぎる！

千里の頭の中で警笛が鳴っていた。

「個人秘書」。たかが葉の管理に、月五十万も出す馬鹿が、この世のどこにいるのだろうか。いや、目の前にいるらしい。

千里は胡散臭さを拭い去れないまま、テーブルの上の創史の名刺を手を取った。

ラウンマークペンライン社は、大手外食企業で、テレビコマーシャルもバンバン流している。メイン事業のファミリーレストラン「トポス」は、ハンバーグを中心としたポピュラーな洋食を提供していて、数年前からデリバリーサービスも開始した。子会社もある。

近年、さらに売り上げを伸ばしており、広告費の掛け方も大胆だ。年間総広告費二十数億。その広告の一翼を、千里が勤める広告代理店、白東エージェンシーは担っていた。こんな押しも押されもせぬ外食企業、ラウンマークペンライン社、代表取締役の橘社長、の個人秘書。千里はその肩書きに怖気づいていた。

* * *

一方の創史は、困惑した様子で名刺を手取る千里を無言で見つめていた。顎のラインで切り揃えられたボブ。前髪もきっちり揃っていて、まるで座敷童子だ。年寄りウケする顔だろう。美人というよりは可愛気のある顔立ちで、丸顔。くりくりとした目は、今は動揺と猜疑心で揺れている。しかし先ほどまでは仕事への熱意が宿っており、手際の上さや、さりげない上司へのフォローも垣間見えた。

小柄なせいかわい印象を受けるが、ブラウンのタイトスカートから覗く太腿はむっちりして至極健康的だ。昨今の痩せ過ぎな傾向にある女性とは対照的だが、太り過ぎということもない。そこがいい。申し分なく好みだ。もともと、彼の好みではないのだから——

高すぎず低すぎず、甘すぎもせず明瞭に通る声にも好感がもてた。髪が栗色なのが

少々気にかかるが、どうやら染めているわけではなさそうだ。よく見ると目の色が少々薄く、肌も白い。先天的に色素が薄いのだろう、と見当をつけた。そうでなければ髪は黒に染めさせるまでだ。その方がアイツの好みだったはずだと考えていると、口元が自然に緩んできた。それを押し殺すように、人のよさそうな笑みを浮かべた。

* * *

「どうかな？ のんびり考えて貰って構わないよ」

千里はしばらく俯き加減で考え、そして顔を上げた。

「……いえ、やります——ぜひやらせてください！」

千里は橋をまっすぐに見て言い切った。

距離を置こう、勝と。職場が変わらない限り、彼と毎日顔を合わせることは必然。彼といふ友達でいるためにも、適度に距離を置いた方がいい。それに、千里には周りの目が痛かった。あの哀れむような視線をずっと浴び続けるのは耐えられない。

——女として見れない。

確かに勝はそう言った。それは自分が、女としての魅力に欠けているということに他ならない。四年の間、身体の関係がなかった事実が、勝の言葉の裏付けとなって、千

里の胸に重くのしかかっていた。

魅力に欠ける自分に、新しい出会いがあるとは限らない。このまま一生、一人かもしれない。それなら収入は多い方がいいに決まっている。

「月五十万なんでもすごいチャンスです。チャンスの神様、月五十万の前髪、ガッツリ掴ませていただきます！」

千里が胸の前で拳を握ると、創史は声を上げて笑った。

「面白いこと言うね。ますます気に入った。葉鳥さんだっけ？ 皆からは何て呼ばれている？」

「会社の先輩方からは『葉ちゃん』って呼ばれています」

「葉ちゃん？ ああ、苗字からか。じゃあ俺もそう呼ぶよ」

構わないかい？ と聞いてくる視線に頷くと「よし決まった」と創史は膝を軽く打った。

「青葉君に相談しようかな。なるべく早くうちの会社にきてほしいしね。おっと、その前に条件を確認しようか。そうだな。まず俺からの電話には必ず出ること。昼夜問わずだ。俺がかかる時は基本的に緊急だからね。それから守秘義務の徹底。この二つは絶対の条件だ。特に守秘義務は必ず守ってほしい。五十万は口止め料だ。会社の機密書類を扱うことも少なくないからね」

そう言った創史の目は真剣だった。少々の仕事のサポートがあると云っていたが、守秘義務に重きを置いた業務なのだろう。月五十万の対価に見合う機密と接する……不安もあるが、その分やりがいもありそうだ。千里はまったく畑違いの業種に、足を踏み入れようとしていた。

「了解です。守れます」

「出張もあるけどいいかい？」

「問題ありません」

「労働時間は十時から十八時が基本。でも残業もある。会議が長引けば帰れない。その時はタクシーを出そう。休みは一応土日。だが確約はできないな」

「タクシーは助かります。休日は基本的に暇なので大丈夫です」

「オーケー。あと、会社の理念をよく理解しておいて貰いたいね。時間を見つけて勉強しておいてほしい」

「了解です」

千里の明瞭な答えに、橘は満足そうに頷いて握手を求めてきた。その手を軽く握る。「ようこそ、橘ファミリーへ。歓迎するよ、葉ちゃん」

数日後、創史は青葉に相談し、千里を引き抜くことを部長に了承させた。千里がデザ

インの仕事にはかかわらず、畑違いの秘書として働くことから、競合他社への引き抜きには当たらないと判断されたのだ。

ちょうど千里は手掛けている案件もなく、打ち合わせをしていたベンライン社の案件は、まだ始まっていなかったため、そのまま別のデザイナーに受け渡すことになり、わりとスムーズに退職できた。

勝と別れてひと月ほど経った十一月半ば、千里は自分が白東エージェンシーを退職することを彼に告げた。

* * *

「え、辞める？」

勝は帰りの電車で揺られながら、千里の言葉を繰り返した。

「うん。今月いっぱいね……ヘッドハンティングされちゃったんだ」

「え、それで……受けたのか？ もしかして俺のせい、か？」

「違う、違う！ やだなあ、まーくんったら。そんなじゃないよ」

千里がヘッドハンティングを受けたのは、自分と別れたことが原因なのだろうか。それとも自分と同じ職場にいるのが嫌になったのだろうか。吊り革を握る手に、じつとり

と汗がにじむ。勝は千里の突然の転職理由を探ろうとしていた。だが、頭がうまく働かない。

千里が会社を辞める。彼の頭にはそれだけが残った。千里が会社を辞めれば、こうして一緒に帰ることもなくなる。ならばいつ彼女と会えばいいのだろうか。そんな考えに囚われながらも、彼女とは友達なのだから、その気になればいつだって会える、と勝は思い直した。

だって自分は彼女のアパートも、携帯番号も、メールアドレスも知っている。

「私はまーくんみたいにデザインの才能ないし。秘書の方が長く続けられるんじゃないかなと思って、ね」

「ちはは、それでいいのか？」

「まだ二十六だし、畑違いの仕事も今なら覚えられると思うし、頑張れるよ」

「そうか……」

千里が働けなくなつたなら、無理に慣れない仕事をしなくても自分が食べさせていくのに。彼女は家に来てくれればいい。自分の手腕ならあと一、二年もすれば看板デザイナーになれる。看板になれば給料も跳ね上がる。そうすれば、ずっと一緒に――

ふと勝は自分の考えに疑問を抱いた。千里を自分が食べさせる？ それは結婚をするということか？ なぜ？ 彼女は友達だろう？ それに、そもそも自分から別れを切り

出したんじゃないのか？

「それにね」

勝が自問自答している中、千里がふたたび口を開いた。ドア付近に立った彼女は、車窓に目を向けながら、頬に流れる栗色の髪を耳にかける。そんな見慣れた彼女の仕草に、勝の胸が跳ねた。もう何年も口付けることもなかった、小ぶりの唇にのせられたグロスが、艶やかに光っている。白い首筋の曲線は千里が女であることを勝に意識させた。

「お給料が倍なの。びっくりでしょ？」

「倍？ スゲーな、それ。大丈夫なのか？ エロいことやらせれんじやないのか？」

「違うよ。何かね、機密書類を扱うからだって。出張もあるらしいし」

「へえ……帰りが遅くなるようだったら連絡しろよ。いつでも迎えに行くから」

「うん？ ありがとう」

返事をしながらも自分の方を一切見ない千里に、勝の胸が波立った。それは変わらな
いと思っていたものが変わっていく、不安と焦燥ゆえ。

ガタンと揺れた電車のせいにして、勝は千里の肩を抱いた。彼女が遠くに行ってしまう気がしたのだ。自分の手が届かないどこかに……

3 橋社長は二人いる？

十二月一日。白東エージェンシーを円満に退職した千里は、ラウンマークペンライン社への初出勤日を迎えた。千里は落ち着いた黒のスーツに身を包み、履歴書を携えて会社の門をくぐる。

ペンライン本社は、駅に付属したオフィスビルのツーフロアを所有していた。本社勤務の社員は八十人未満ということを知り、意外と少ないことに驚きながら、千里は創史の前に立つ。

「やあ！ よくきたね、葉ちゃん。待っていたよ」

パーテーションで区切られた一角で、紙の束に埋めながら創史が手を振ってきた。

このオフィスには社長室がないらしい。パーテーションで区切られているものの、役員も平社員も、壁がぶち抜かれたこのオフィスで仕事をしていた。

「橋社長、今日からよろしくお願い致します」

千里が履歴書を差し出して挨拶すると、創史は社長面接をクリアしているんだから、履歴書なんかいらぬのに、と笑う。それでも一応ざっと目を通して、社員の履歴書を

保管している鍵付きの棚に入れた。

それからいくつか就労要項を確認し、千里は契約書に判を押した。これで千里はラウンマークペンライン社代表取締役社長・橋創史の個人秘書だ。

「よし、じゃあさっそくだけど、携帯の番号教えて？ アドレスは必要ない。俺は携帯のメールは使わない主義だ。用件は全部電話で伝える」

そう言われて千里は、創史に電話番号を教えた。するとすぐに創史がかけてくる。

「それ、俺の携帯ね。登録しといて。ちなみに他の秘書はその番号を知らないから、もし聞かれても教えないように」

「？ ……かしこまりました」

——他の秘書が社長の電話番号を知らないとは、何ぞや？

今までどうやって緊急時の連絡を取っていたのかと千里が訝しんでいると、創史は梅田という男性秘書を紹介してきた。

「これが梅田。葉ちゃんが仕事の話をするとすれば、俺とこいつくらいだ——梅田、この子が前に話した葉鳥さん。葉ちゃんね。個人秘書っていか付き人やって貰うから。これ、葉ちゃんの番号。何かあったらこっちに連絡して。葉ちゃん、梅田の番号も登録して」

梅田は黒縁の眼鏡を掛けた五十代と思しきひよろ長い男で、創史が太めのせいひ弱

に見える。彼はペンラインの先代社長の秘書だったらしい。

「これでようやく社長の居場所が掴めるわけですね」

「甘いな、梅田。葉ちゃんには守秘義務を課したから、俺の居場所はわかるまい。まあ、内容によっては折り返し電話する。前よりマシだろ？」

連絡がつくなら御の字です、と頷く梅田を見て、千里は創史がたびたび連絡が取れない状態に陥っていたらしいことを察した。

「では、葉鳥さん。社長のお守りをよろしくお願いします」

「は……はい」

——お守り!?

頭を下げて立ち去っていく梅田のうしろ姿を見ながら、千里は内心悲鳴を上げていた。こんな白髪の新じった四十代男の「お守り」が個人秘書の仕事なのか!?

「つたく、お守りとか言うなよ。まあ、薬の世話はして貰う。数が多くてわからん」

創史は椅子のうしろのロッカーの中から、薬の袋を五つほど取り出してガサツと机に並べ、さらに鞆かばんの中からはぐしゃぐしゃに丸められた薬の説明書を取って、千里に見せた。「な? 多いだろ? 一日二回のと、三回のと、寝る前のとが……何か色々あるんだ。

それから健康食品? 身体にいいからって勧められたものとか——」

次に机の引き出しの中から、薬局でよく見かけるサプリメントの瓶をいくつつか、それ

から青汁の粉袋が入っているらしい箱を取り出して並べる。全部で何種類あるのだろう! 病院からの薬は必須としても、サプリメントの数もやけに多い。ダボハゼのように何でもかんでも口に入れては、何が効果があったかもわからないだろうに。

千里は眉をひそめ、薬の説明書の皺しわを伸ばしながらざっと目を通した。どうやら創史は心臓が悪いらしい。おまけに胃の炎症を抑える薬も処方されている。

千里は並べられた薬とサプリメント、健康食品の山を見ながら、創史の机の上に置いてあった緑色の液体で満たされたコップを指差して進言した。

「ざっとしか目を通していませんが……橘社長、その青汁を飲むのはやめた方がよさそうですね」

「え、何で? 婆ちゃんが青汁は身体にいいから飲めって買ってくれたんだけど?」

創史は毎朝飲んでるのだと誇らし気に言う。千里はため息をつきながら、先ほど自分が押し付けられた薬の説明書の一文を指して説明した。

「橘社長が病院から処方されているお薬ですが、この説明書きによると、ビタミンKがお薬の効果を弱めてしまうそうです。青汁や納豆、クロレラ、緑黄色野菜の大量摂取は控えるように、と記載されています。通常の食生活以外に青汁を飲んで、ビタミンKを摂取するのはよくないようです。なので、青汁はやめましょう」

創史は目を丸くして薬の説明書をひたたくった。

「うわ、本当だ。自慢じゃないがまったく読んでなかったよ、この紙。……え、じゃあいつも病院の先生が診察の度に唸うんってるのは青汁のせいか!」
 どうやら薬の効果が医師の思うんった通りに出ていないらしい。

千里は目眩めまいを覚えた。最初に会った時の威圧感ゐあつかは消え去り、彼女の目の前にいたのは、自分の病状も、処方された薬もろくに把握できず、しおれている男だったのだから。

「橘社長、サプリや健康食品はちよつとやめておきましょう。病院で確認してからの方が確かだと思われます。私も病院にご一緒させていただいて、お薬の説明を受けた方がいいんじゃないでしょうか?」

本人もろくに把握していない薬の取り扱いに対し、こんな一枚の紙っぺらでは不安を感じた千里は、医師と薬剤師から詳細な説明を受けることを提案した。

「そうだね。じゃあ今度、時間作って行こうか。いやあー参ったな。婆ちゃんがさ、青汁、青汁って言うから、苦いけど我慢して飲んでたんだよね。続けてたら癖になつてさ、意外とイケるかもって思ってたんだけど、まさかこれがよくなかっただなんてショックだよ。俺、婆ちゃんっ子だからさあ。素直に婆ちゃんの言うこと聞いてたんだよね」

顔をしかめながら首のうしろを搔かき、創史は椅子に深く腰掛けた。青汁の箱を机に置いたと思いきや、今度は引き出しからクロレラのパックを取り出した。

「やばいな。俺、クロレラも時々飲んでた」

一般に身体にいいとされているものが、処方された薬と相性がいいとは限らない。千里は苦笑いしながら、サプリをやめたら病院のお薬の量が減るかもしれませんね、と彼を励ましたのだった。

「橘社長——」

「ああ、葉ちゃん。『橘社長』はやめてくれ。創史と名前で呼んでくれないか」

「え、あの、そ、創史、さん?」

「以後それでよろしく」

「でも、あの、社長ですし、ちよつと……」

社長を下の名前で呼ぶのは気がひけると、千里が戸惑っていると、創史は軽く手を振って、気にするなと告げた。

「そのうち紹介するけど、我がベンライングループに『橘社長』はもう一人いるんだ。梅田をはじめうちの社員は、そっちとあまり話さないから問題ないが、葉ちゃんはちよくちよく話す機会があると思うんだよ。だからね、最初から下の名前の方でいい」

「は、はあ……」

「ああ、葉ちゃんに青汁とクロレラあげるよ。身体にいいんだってよ?」

——橘社長はもう一人いる?

「葉ちゃん、色々頼りにしてるよ!」

千里が言われたことを理解するより先に、創史は青汁の箱とクロレラのパックを彼女に押しつけて、ニツと笑った。
その笑みの理由を、千里はのちに知ることになる。

今日は十二月二十一日。

「えっ！ 創史さんって、三十二歳だったんですか!？」

千里と創史は、某ホテルで江戸前寿司に舌鼓を打っていた。

カウンターの向こうでビチビチと跳ねる生きた車海老が、寿司ネタにさばかれていく。店主直々の鮮やかな握りを披露されながら、千里は創史の実年齢に驚きの声を上げていた。二十六歳の自分と六歳しか違わない。大変申し訳ないが、創史の老けこみようは、どう見ても四十代だ。何か騙された気分になり、千里は口をまごつかせた。

「葉ちゃん、何気に失礼な反応だな。俺はよく四十代に見られるが、まだまだ若いぞ」

「い、いえ。すごく……か、貫禄！ 貫禄があるので……」

はい、私も貴方は四十代だと思っていました、とは言えず、千里はカウンター席の隣に座る創史の顔をまじまじと見つめた。言われてみれば肌つやは四十代にしてはいいし、小皺こじわもない。

老けこんで見えるのは、おそらく白髪はくぱのせいだろう。柔らかくうしろに撫で付けられ

た髪は、少し癖があるのか緩やかにうねっている。そこに、まだらに生えている白髪が目立つのだ。かつ体型も拍車をかけている。もし痩せていたならば、少しは違って見えるのかもしれない。

「創さんは白髪がいけないよ」

壮年の店主が、先ほどさばいた海老の頭を油の中に入れてながら話に割って入ってきた。千里は思っていたことを代わりに言って貰え、うんうんと頷く。

「そうかな?」

創史は、自分の頭に手をやった。

「そうさ。髪の色一つでだいぶ印象が変わるものだよ。創さんは口を開けば歳相応だけどね」

「言ってくれるな。代表取締役なんて年嵩としかさに見えた方が何かと楽なもの」

店主の言葉に苦笑いして、熱いお茶を口に運ぶ創史を見つめながら、千里は初めて彼と昼食に行った時を思い出した――

「葉ちゃん、昼飯に行こう」

「あ、はい」

初めて出社した日に訪れたのは、国産和牛の高級ステーキ専門店だった。昼からこん

な大層なところへ連れてきてくれるということは、もしかしたら歓迎会の代わりなのかもしれない、と千里は思っていた。

「いらっしやいませ」

店員にうやうやしく案内されたのは、横並び四人席の個室だった。テーブルに置かれた赤いナブキン。高級感漂う椅子。どうやら目の前の銀色に輝く鉄板で、店のスタッフが肉を焼いてくれるらしい。

「さてと、サーロイン、フィレ、リブローズどれがいい？」

「えっと……よくわからないのでお任せします」

「はは。お任せ、ね。——サーロインは百五十グラム、フィレは百三十グラム、リブローズは百七十グラムだ。量で決めるのも一つの手だよ」

「ではサーロインで」

「はいはい。俺はリブローズにするかな」

創史は店員に注文すると、隣に座った千里に向き直った。

「さて、葉ちゃん。少々仕事の話をしようか」

そう言った創史の目が至極真剣で、千里は思わず息を呑んだ。初めて会った時の威圧感が蘇る。目の前の男は、全国千六百七店舗の大手ファミリールレストラン「トボス」を経営する、ラウンマークベンライン社の代表取締役社長なのだと、否応なしに実感させ

られた。

「まず、我がベンライン社は外食企業……つまり飲食店を生業なりわいとしている。他社が提供する食事、サービスを実際に体験し、優れた部分は積極的に取り入れたいと考えている」

「はい……」

「このステーキ店はもと肉屋でね、明治時代に創業したそうだよ。我がベンラインもこの店ほどの歴史はないが、俺の祖父母が経営していた洋食店がトボスの原点だ。俺は二代目ということになっているが、正確には三代目だ」

千里は創史の話聞きながら、真摯しんしんに頷いた。

「トボス」という名称はギリシャ語の *Topos* (場所) に由来しており、それは単に食事をする場所だけではなく、お客様がいつきてもくつろげる場所であるように、という意味を込めて自分の祖父が名付けたのだと創史は語った。

創業から現在のトボスの発展。子会社を作るまでの道のり、そして今後の展望について、さらに創史は続ける。そこには押しも押されもしない社長、橘創史の姿があった。

「——とりあえず、今後は『よくわからないのでお任せします』は、俺との食事の席では通用しないと求めてくれ。何でもいい、自分の意見を言っしてほしい。こうやって外で飯を食うのも仕事の一環だ。たとえばメニュー一つ選ぶのもお客様の視点が反映されていると俺は考えている。推測だが、君は肉の部位がわからなかったんじゃないか？ も

しお客様がそれを知りたいと思った時、説明する仕事というのがこの店側に発生するだろうか？ どう説明してくれるのか、聞いてみたいと思わないか？ 我がトボスにおいても、お客様からメニューの説明を求められる場合もあるだろう。そういうのを俺は想定したいし、今後の対応マニュアル向上のためにもさらに活かしたいと考えている。俺が食事に誘う時は単に道楽だけで飯を食いにいきたいと思っっているわけじゃないってことだけは、頭の片隅に入れておいてくれ」

千里は、歓迎会なのかもしれない、などとお気楽に考えた自分が急に恥ずかしくなった。肉の部位がよくわからなかったのも凶星だ。

そう、ベンライン社は外食企業なのだ。誰もが気軽に口にできる食事を提供する。ジャンルにこだわらない料理、リーズナブルな価格設定、常に上を目指す姿勢とこだわりというものが、この創史からはビシビシと発せられていた。

「はい！ 肝きもに銘めいじます！」

「まあ、俺は食うのが好きだから、道楽っていつちゃあ、道楽なんだけどね。どうせ食うなら美味しいものがいい。一人で食うより話し相手があった方がいい。一緒に食うならムサイ男より女がいい。君を俺の個人秘書にしたのもそういうことだ」

せっかくのいい話が台無しだ。創史なりに千里を氣遣って、そう言ってくれたのだからうけれど。彼女はそれに応えるように微笑んだ。

「私も美味しいものを食べるのは大好きです」

「そうそう、美味しいものをタダで食えるオイシイ仕事だと思ってくれ。ああ、でも体重が増えるのが玉にキズだ。そこは自己管理してくれよ。ハッハッハッ」

自己管理をちゃんとしないうとうなるぞ？ と言いながら、自分の太鼓腹をバシンと叩いた。波打つ腹を揺すって屈託くつたくなく笑う創史は、社長の顔ではなくプライベートの顔を覗のぞかせていた。そんな彼のココロと様変わりする表情を見て、千里は戦慄せんりつを覚えたのだった。人間が何となくわかってきた気がした。

ちなみに、スタッフが目の前で焼いてくれたサーロインは、頬が落ちるほど美味しかった。おかげでスーパールの肉を家で食べた時、何とも味気ない気持ちになっちゃって、これが仕事の弊害かと、己の舌が肥えることに千里は戦慄せんりつを覚えたのだった。

「はい、海老のお頭揚げです。お塩でお召し上がりください」

海老の握りを口に入れた千里の前に、カラッと揚がった海老の頭が置かれる。寿司といえは一皿百円の回転寿司がお馴染みの千里にとって、目の前で生きた海老をさばかれるのも、寿司屋で揚げたての天ぷらを食べるのも初めてのことに。創史との食事は何もかもが新鮮だった。

「ここの踊りは最高だよ。海老の頭は味噌汁にも入れてくれる。あとで出てくるよ」

「海老は一貫しか食べてないの?」

「そりゃ、他の海老のダシでさ」

創史との会話にも慣れ、千里は楽しくなってきた。彼はよく食に関するうんちくを語る。「踊り」というのが、生きた海老を指す江戸前寿司の隠語だと教えてくれたのも彼だった。

教えてくれるだけでなく、千里が家でどんなものを食べるのかも彼は聞きたがった。

「昨日の晩飯は何を食べた?」

「昨日はですね、スープでもやしが一袋二十円だったんです。いつもは三十五円なんですけどね。なので、もやししゃぶしゃぶをしました」

「何だいそれは? もやしだけをしゃぶしゃぶにするのか?」

「ああ、白菜も入れますよ? 昆布ダシにもやしをくぐらせて、しゃぶしゃぶのタレや、ポン酢で食べるんです。さっぱりしていて美味しいですよ」

「肉は?」

「ありません」

肉はないと言うと、創史は苦笑いしながら揚げたての海老をパクツと口に放り込んだ。「肉がないなら、ただの『茹でもやし』だろ」

「いいえ、もやししゃぶしゃぶです。こう、カセットコンロに土鍋を置いてですね、しゃ

ぶしゃぶつとするわけですよ? 立派なしゃぶしゃぶです」

本当なら千里も肉を入れたいところなのだが、創史と昼間の食事を共にするようになって、毎度毎度高カロリーの美食メニューを腹に入れると、夜まで満腹感が残ってしまい、家では自然と野菜中心のメニューになっていたのだ。

もやししゃぶしゃぶには根取りもやしを使うのがポイントです、としゃぶしゃぶのジュエスチャーをしながら熱弁を振るう彼女を、創史は目を細めながら見つめていた。

4 クリスマスの予定は仕事です

気が付けば創史の個人秘書になってから三週間、千里は勝と一度も会っていないかった。彼と出会ってから、こんなにも長い間会わなかったことなど初めてだ。しかしそんな状況にも新しい職場、新しい環境の中で、いつの間にか慣れようとしていた。

ベンライン社では毎週木曜日に定例会議が開かれ、その日だけは定時に上がることが難しくなる。電車がないわけではないのだが、創史は最初の約束通りにタクシーを手配し、千里はそれに乗ってアパートまで帰っていた。

千里のアパートは駅の真向かいにある。わりと大きな駅なので、電車や踏切の音など、

喧騒が気にならないといえは嘘になるが、それでもこの立地の条件のよさは魅力的だ。勝のアパートも最寄り駅は同じだが、駅から少々歩く。どんなに家が近くても、会おうとしなければ意外と会うこともないのだな、と千里は今さらながらに実感した。こうして少しづつ二人の関係を变えていけばいい。

熱いシャワーを頭から浴びながら、千里は今日、創史から言われたことを思い出し出した。

「葉ちゃん、クリスマススの予定は？」

「二十四日木曜日は、東日本加工食品様と昼食をとりながらの会談、二十五日金曜日は、午後から子会社トリロジの……」

二十四日から二十五日にかけての創史の予定を読み上げていた千里を、彼は持っていた書類を振って遮った。

「違う、違う。君のプライベートの予定を聞いてるんだ」

一瞬キョトンとした千里だったが、すぐに苦笑いして予定はありません、と答えた。

「オーケー。それじゃあ、二十五日にお誘いしても構わないかい？」

「……それはプライベートで、ですか？」

警戒を含んだ千里の声に、創史は笑う。

「残念ながら違うよ。プライベートでお誘いしたいのは山々だがね。二十五日はトリロジの人間がくる予定だったね？ 彼らのレストランに向向して試食することになってる。夕食になるが、それに君も同席して貰いたい」

「承知致しました。問題ありません」

仕事の話ならまぎらわしい言い方をしなくてもいいのに、と千里の顔に書いてあったのだから、創史は弁解するようにおどけてみせた。

「いやね、イブは木曜日だ。会議があるだろう？ 遅くなるじゃないか。クリスマス当日は金曜日だし、恋人がいたら早く帰りたいだろう？ だから念のために聞いたのさ」

「そうでしたか。お気遣い頂いたところ恐縮ですが、残念ながら恋人はいません。募集中です」

こうして創史に合わせて軽口を叩くこともできるようになった。わりと短期間で彼に慣れたのも、彼と毎日のように二人で食事をしているからかもしれない。

「そうかい。葉ちゃんは恋人募集中か。それはいいことを聞いたよ」

朗らかな表情から一変して、創史は手に持っていた書類を千里に渡してきた。それは社長の顔。毎度のことながらこの切り替えの早さは見事としか言いようがない。

「それ、破棄」

「了解です」

千里は受け取った書類に目を通すことなく、すぐにシュレッダーに掛けた。これは創史が千里に徹底させている業務のうちの一つだった。「破棄」と言われた書類は見えない、置かない、尋ねない。

以前「破棄」と言われた書類を、千里が持ち直すためにデスクに置いたことがあった。もちろんすぐに手に取ったのだが、創史は静かにその行動を注意したのだ。

『それは機密書類だ。人目に晒さらせないからこそ破棄する。一度渡されたら確実に破棄するまで、その手から離すな』

いつにない真剣な物言いに、千里はただただ頷うなずいたのだった。

千里はシャワーから上がると、髪を乾かしながらテレビをつけた。クリスマスまであと二日だからだろうか、人恋しい。夕食を作る気力も湧かず、コンビニで買ったサラダスパにドレッシングをかけて黙々と食べていると、鞆かばんに入ればなしにしていた携帯が着信を告げた。

『俺からの電話は必ず出ること』

創史にそう言われたことを思い出し、鞆かばんに飛びつき携帯をまさぐる。開いた携帯のディスプレイに映し出された名前は――

「もしもし？ ちさ？」

ついこの前まで一番近くにいた男の声を聞いて、千里の心は一瞬にして乱れた。それがとてつもなく悔しい！

――彼は友達なのに、友達なのに。

消えたはずの――忘れたはずの――胸のチクチクが蘇よみがえった気がした。

「あつ、まーくん？ 久しぶり〜」

意識して、何でもない風な声を出す。

「久しぶりだな。ちさ、元気にしてたか？」

「うん。元気だよ〜」

「連絡ないからさ。ちさ、どうしてるのかなと思って。帰り、遅くなったりしてないか？」

「大丈夫だよ〜」

本当は毎週木曜日は遅くに帰宅している。タクシーを使って帰っているから、千里は勝に「遅くなったから迎えにきてほしい」と一度も連絡していない。そして、するつもりもなかった。普通、ただの男友達にそんな連絡はしないだろう。彼とは友達の間隔を保ちたかったのだ。

「そっか。ならいいんだ」

「ありがと。心配してくれて。仕事もね、だいぶ慣れたよ」

「そっか。よかったな。本当はもっと早く連絡しようと思ってたんだけど、疲れてるか

など思っただけ。メールでもよかったんだけど、せっかく連絡するなら声聞きかけたから電話にした」

「あはは、気を遣ってくれたんだね。ありがと。大丈夫、社長もいい人だし、楽でオイシイ仕事させて貰ってるよ」

* * *

勝は以前と変わらない千里の声にほっとしつつも、何か物足りないものを感じた。だが今はそれが何であるのか考えずに話を進める。

この三週間、会わないばかりか、電話もメールさえもしなかったのは、彼女の方からアクションを起こしてくれるのを待っていたからなのだ。クリスマスまで残り二日にせまり、痺れを切らした勝は、ようやく自分から彼女に電話した。

メールにしなかったのは、声を聞きたかったこともあるが、何より無視されるのが怖かったから。無機質な文字の羅列から彼女の反応を知るのではなく、実際の彼女の反応がみたかった。今日はそのために電話したのだから。

「今年のクリスマスって金曜日だろ？ イブはさすがに無理だけど、クリスマスは一緒に過ごさないか？ ちさの好きな……」

ちさの好きな店のケーキを予約してるから、そう言おうとした言葉が、受話器の向こうの声に遮られた。

「ごめんね。クリスマスは予定があるの」

「えっ？」

一瞬で勝の頭は真っ白になった。

クリスマスは、この六年ずっと彼女と過ごしてきた日。この日でなくても、普段からいつも一緒だったが、特にこういったイベントは欠かしたことがなかった。

別れているくせに、勝はこれまでの習慣通り、彼女の好きなカフェのケーキを予約していた。チョコレートケーキにイチゴがふんだんに載った、千里が好きだと言っていたケーキ。毎年、二人の誕生日とクリスマス、年に三回一緒に食べていたケーキ。

もう、クリスマスを一緒に過ごすような男ができたのだろうか？

短い時間の間に勝の頭の中には、思い出と、まだ見ぬ男への嫉妬と、自分の浅はかさ責める思いが、滝のように流れこんできた。

変わってほしくないものが変わっていく。そしてそのキッカケを作ったのは、間違はなく自分。

「クリスマスは子会社に試食出向なの」

「仕事……忙しいんだな」

何だ仕事か。勝は思わずほっと息をつく。仕事、それなら仕方ない。仕事なら。

「たぶん、年末だからじゃないかな。会議もあるしね」

「飲食業界は年末が忙しいんだな」

「そうなのかも」

「遅くなるなら迎えに行こうか？」

「何時になるかわからないし、たぶんタクシーで帰るから……」

「迎えにこないよ、そう言われて、「俺がちさに会いたいんだ」という素直な一言が喉に詰まる。それじゃあ無理しないように気を付けろよ、と当たり前障りのない会話に繋げて、勝はおやすみと電話を切った。

電話を切った瞬間、彼は猛烈に後悔した。なぜ言わなかったのかと。別にクリスマスでなくてもいいから会いたい、となぜ素直に言わなかったのか。

自分の言葉を悔いながら、勝は携帯をベッドに投げ捨てた。ぼすんと枕に沈むそれを見つめ、同じように投げ捨てられない男のプライドを、心の中で罵る。

自分から別れを切り出した女に対する、ちっぽけな男のプライド。それが勝の会いたいという一言を塞いでいた。

そして、ふと気が付く。電話中に何か物足りない気がしたわけを――

「最悪だ……もしかして俺、『会いたい』って、ちさに泣いてほしかったのか？」

* * *

二十四日、取引先との昼食をとりながらの会談は、千里も参加して行われていた。そんな重要な場に同席させられ、千里は非常に緊張して初めは食事どころではなかった。

東日本加工食品は、ペンライン社のトポスやデリバリートポスの料理の加工を一手に引き受けている会社で、この会談は社長同士の忘年会のようなものだった。

「ほー葉鳥さんね。可愛い方じゃないですか。橘さん、再婚なさるんですか？」

ようやく緊張もほぐれてきた頃に浴びせられた東日本加工食品社長のこの質問に、一番驚いたのはもちろん千里だ。彼の言葉は、創史が過去に結婚していたことを教え、かつ自分を再婚相手として捉えていることを示唆するものだったからだ。

「はは、ご冗談を。こんな情けない男の後妻に入る酔狂な女性はそうありませんよ」

「いやいや、橘さんはまだお若い。これからですよ」

そんな二人のやり取りを、千里は驚きながらもポーカーフェイスでやり過ごした。

「驚いたろう？」

「知りませんでしたから……正直驚きました。ご結婚されていたことがあったんですね」

会談が終わり、車の中で千里が素直に言うと、創史も小さく苦笑いした。

三十二歳。結婚の経験があってもおかしくはないが、彼の雰囲気からは、そういった家庭的なものを一切感じない。むしろ、独身貴族を謳歌している印象を受けていた。

「二十五で結婚して二十七で離婚した。まあ、失敗した結婚さ。おかげで女を見る目はシビアになったよ。もう結婚はしない。俺は結婚に向いてない——」

自嘲気味な乾いた笑い声で、彼がよほど苦い思いをしたことがわかる。千里は何と言っているかわからず、神妙な顔で相槌を打った。

「……創史さんは、お一人で寂しくはないんですか？」

千里がそう聞いたのは純粹に疑問に思ったからというのものもあるし、自分が今、一人だからかもしれない。彼は一瞬目を見張ったが、やがて少し頬を緩めた。

「ああ、最近は寂しくないよ。君と一緒に食事してるしね」

今度は言われた千里の方が面食らう番だった。何度か瞬きして創史を見つめる。

「だからといって君とは再婚しないよ。いろんな意味でご安心を。俺に惚れるなよ？ やけどするぜ？」

そう創史がおどけてみせたので、千里は一気に吹き出してしまった。

「やだ、創史さんったら！『俺に惚れるなよ？』だって！ やけどって、あくやだ、おつかしい〜」

「はは。結婚はしてあげないけど、愛人としてなら囲ってあげるよ。どう？ 俺の愛人にならない？ 給料は今の倍だ」

「も〜つ、私はそんな安い女じゃないですよ〜」

二人して笑いながらふざける。

創史は話の流れで結婚、離婚、再婚、愛人を語ったにすぎない。彼が再婚を考えていないのは本当でも、自分を愛人として囲うというのは、彼流のジョークだろうと彼女は踏んだのだ。

女の魅力に欠ける自分を、誰が金を払ってまで愛人にするものか。それにたとえ彼が本気だったとしても、金のために愛人をやるなどお断りだ。

「あーあ、葉ちゃんはツレないね。じゃあ俺がダイエットしたら付き合ってくれる？」

「ふふ、勤務中の食事ならお付き合いしますよ、創史さん？」

「じゃあ、残業代を付けるから、明日のデイナーも付き合ってくださいよ」

じゃあ、遠慮なくお願いします、と残業代を取り付けた所で車が本社に着き、千里は先に降りた。

「あーあ、葉ちゃんはあしらうのが上手いね。実はなびいてくれるかなあなんて、ちょっと期待したんだけどなあ。やっぱり葉ちゃんには有史の方がお似合いかねえ？」

彼女が降りた車内で、創史の零れた呟きに応えたのは、お抱え運転手の苦笑いだけ

だった。

5 もう一人の橘社長

「橘社長、お久しぶりですう〜」

クリスマス当日。終業間際になって、パーティーションをコンコンと叩いた音に千里が振り返ると、そこにいたのは真つ白な歯を見せて笑う爽やかな青年。中性的な顔立ちの魅力的で、とても千里の好みだった。思わずじっと見つめてしまう。

彼は短い前髪を立てて、ビシッとスーツをまとっているものの、右耳には銀リングのピアス一つ付けており、他のペンライン社員とは明らかに異彩を放っていた。

彼が声を掛けた創史は電話中で、軽く視線を向けて手を上げ、待つように指示をしている。彼は千里の視線に気が付いたらしく目が合った。するとすぐに笑顔を引つ込め、鋭く睨みつけてきた。思わず千里はたじろぐ。

「ちよつと、あんた誰え？ 梅爺はあ〜？」

「はじめまして、橘の秘書を務めております葉鳥と申します。どうぞこちらにお掛けになつてください。梅田もおりますよ、呼んでまいりますでしょうか？」

「秘書お？ 社長の秘書は梅爺でしょ〜」

そこはかとなくイントネーションがカマ臭い。何となく敵視されているのを感じて、千里が彼の扱いに困っていると、電話を切った創史が苦い顔でその青年を見やった。

「久しぶりだね、伊藤君。相変わらず派手な耳のそれは何とかならないのかね？」

「ウフフ、僕のアイデンティティですう〜」

創史は、何がアイデンティティだ、くだらない、と鼻で笑って千里にお茶を淹れるように指示し、伊藤には目の前の椅子に座るように促した。

「葉ちゃん、彼は子会社トリロジの人間で、伊藤君だ。……伊藤君、彼女は」

「葉鳥ちゃんでしょ。秘書ってどういうことですかあ〜？ 女性を秘書にするくらいなら、僕を秘書にしてくださいよお〜」

創史に流し目を使う、伊藤の仕草が気持ち悪い。見た目だけなら文句なしに好きなのに、と残念に感じながら、千里は持ってきたお茶を、何となく彼から遠い所に置いた。

「君に秘書なんかやらせられるか。冗談じゃない。ところで有史は一緒じゃないのか？」

「有史さんは今日は出先から電車できますよお〜。そろそろきますからあ。もう！ そんなことより橘社長ったらわかっているくせにい〜！ 僕、ずっとアプローチしてるんですよお〜？」

ぞわぞわ〜と千里の腕に鳥肌が立った。チラッと伊藤を見ると、不幸にも彼と目が

合つてしまふ。

「何よ？ 僕がいい男だからって色目使つてんじゃないよ。僕はね女より男が好きなの。残念だったね。どうしても相手してほしかったら、最低でもあと五十キロくらい太つてから出直しなさい。出会つて早々僕に失恋した可哀想なハ・ト・リちゃん！」

どうやら伊藤はデブ専のゲイらしい。

千里の顔の前で、人差し指をチツチツと振る仕草がまたもや気持ち悪い。最初は少しトキメいたけれど、自意識過剰男などこちらから願ひ下げだと、千里は苦々しい思いを顔に出さないよう努めるのに精一杯で、背後にもう一人の男が立っていることに気が付かなかつた。

千里がお盆を持ったまま、伊藤から逃げるようにして勢いよくうしろを振り向くと、ドンと固いもので鼻を強打した。

「おっと、失礼。大丈夫ですか？」

痺れるようなバリトンボイスに、鼻を押さえたまま思わず顔を上げると、目の前にあつたのは知的なブラックスーツと、ブラウンゴールドのネクタイ。千里よりも頭二つ分背の高い男がそこにいた。

「あ、いえ。すみません。大丈夫です。ありがとうございます」

「いいえ。うちの伊藤がまたふざけたんでしよう？ 申し訳ない。伊藤、いい加減にし

ないか」

注意された伊藤は聞いているのかいないのか、目を逸らして知らんぷりを決め込んだ。いい大人がこの態度はどうなのか？ と千里が眉をひそめそうになった時、創史が立ち上がった。

「やあ、待つていたよ、有史！ トリロジの三号店、期待してるよ」

「おかげさまで自信の新メニューができましたよ。伊藤もこう見えて頑張っているんです。大目に見てやってください」

軽く頭を下げながら、部下の態度を謝罪する有史という男に、千里はお茶を用意するために下がろうとしたところを、創史に引き止められた。

「ああ、葉ちゃん待つて。もう出るし、お茶はいいよ。先に紹介する。彼は橘有史。俺の弟で、子会社トリロジの社長だ」

はじめまして、と千里に挨拶した有史は、面長で高い鼻梁^{びりょう}。彫りが深く、清潔感のある短い黒髪で太鼓腹の創史と兄弟といわれても、冗談かと思うほどに似ていない。いや、背が高いところは同じか。左目の片二重は何を考えているのかわからないが、ビジネスライクに徹しているようにも見えた。

「はじめまして。橘の……創史さんの秘書を務めております葉鳥と申します」

彼の苗字も橘で、しかも社長だから、橘の秘書……と言うのもおかしい気がして、千

里は創史の秘書と言いい直した。創史が下の名前で呼ぶようにと言った理由の「もう一人の橋社長」が、千里の目の前にいた――

ペンライン社での話もそこに、創史、有史、伊藤、千里の四人は、オープンまであとわずかのトリロジー三号店に、車で移動することになった。今回は同店のオリジナルメニューの試食とともに、オープン前の店内チェックも兼ねているのだ。

助手席に伊藤が座り、創史と有史の間に挟まれるように千里は座らされ、ずいぶんと居心地の悪い移動時間を過ごす羽目になった。

創史の太めの尻に心なしか押され、有史の方に追いやられている気がする。

「この子ね、白東エージェンシーから引き抜いたんだよ。元デザイナーなんだけど、なかなか気が利くよ。葉鳥千里さん。俺は葉ちゃんって呼んでる」

「そうですか。兄さんが引き抜くなんてよっぽどですね」

橋兄弟の間ですっかり萎縮してしまった千里は、何を話せばいいのかわからずに、ますます縮こまる。

「葉ちゃん、有史も名前で呼んでやって。橋って言われると、二人とも振り向くから」

「じゃあ、じゃあ！ 僕も創史さんって、名前で呼んでいいですかあ？」

突然割り込んできた伊藤に、創史は君に呼ばれると気持ち悪いからやめてくれ、と軽く手を振ってあしらった。伊藤は残念そうにうなだれながら、僕は諦めませんからね！ となぜか食い下がる。創史はそれを軽く無視した。こんなやりとりには慣れているのかもしれない。

「えっと、有史さん、で、よろしいんでしょうか？」

「ええ、構いませんよ。俺は自社の社員からも下の名前で呼ばれていますから」

それならと、千里が頷くと、有史は口元だけで微笑んだ。

「有史はトポスとはまた違った、高級志向の創作料理レストランをやりたいと言いついてね。せっかくだし子会社化して、トリロジーを任せているんだよ」

「レストラントリロジーのお話は、白東にいた頃に上司が話しているのを聞いたことがあります。とても美味しいお店だと。そこでしか食べられない味だと言っていました」

「それは有難いことです。もしかして上司というのは青葉さん、ですか？」

千里が頷くと、彼にはいい仕事をして貰いました、と有史が言う。創史も彼に同意した。

「青葉さんはお元気ですか？」

「ええ。ひと月前に会ったのが最後ですが、相変わらずの愛妻家さんでした」

「青葉君が既婚者なのは知っていたが、愛妻家ね？ クールな彼からは想像できないな。――有史もそろそろいい年だ。嫁を貰ったらどうだ？ 婆ちゃんも気にしていたよ」

有史はすっと目を細めて創史を軽く睨んだ。

「まさか兄さんから結婚しろと言われるとは思いませんでしたよ」

「相手を間違えなきゃ、結婚は悪いものじゃない」

自分は失敗したくせに人には勧めるのかと言う有史の皮肉を、創史は軽く流した。

「残念ですが女性には縁がないもので。当分そんな話を持ち上がることはありませんよ」

「やれやれ、有史の女嫌いは筋金入りだからな……伊藤君に引きずられていないか心配だよ」

「大きなお世話です。俺は男にはもっと興味がありません。それから女嫌いじゃなくて、女性に慣れてないだけです」

ブスツとした有史は創史から目を逸らし、窓の外に目をやった。明らかにこの話題はもう終わりにしたいようだった。

空気を読まない伊藤が、有史さんはイケメンだからその気になれば絶対モテますよ、と言うと、有史は眉間に深く皺を寄せながら、フンと馬鹿にしたように笑った。

確かに整った顔立ちだと思い、千里が伊藤に同意するように軽く相槌を打つと、有史はギョツとしたように振り返り、捲し立ててきた。

「伊藤に同意しないでください。彼の言う『イケメン』は一般的なイケメンではなくて、ゲイの隠語で『ゲイに好感を持たれる顔』という意味です。俺にそっちの趣味はありま

せん！」

何かゲイに苦い思い出でもあるのだろうか。ビジネスライクに徹していた彼の素顔が垣間見えたようで少しおかし。

「大丈夫ですよ。有史さんは十分に一般的なイケメンで通用しますから。女の私が言うんだから間違いありません」

千里が笑いながら言うのと、有史の動きが止まった。みるみる頬が染まって、耳まで赤くなっていく。それはどうも……と言う彼の言葉は口の中でまごつき、千里の耳に届いた時には創史に思いつきからかわれていた。

「お前、そこは格好よくサラツと流すところだろ。純度百パーセントで照れてどうする」「あー……。兄さん、もう勘弁してください。慣れてないって言ってるじゃないですか」

有史は片手で顔を覆って俯いてしまった。彼の反応があまりにも初々しくて、笑うのは可哀な気がするが、図体のデカさとのギャップにどうしても我慢できず、「有史さんは可愛い人ですね」と思ったことを素直に口にして、小さく笑った。

「か、可愛い？俺が、ですか？」

千里が頷くと、「可愛いというのはこんな三十路前の男ではなく、貴女のような女性に使う言葉です、貴女の方がずっと可愛いですよ」と有史はサラリと言ったのけたのだ。今度は千里が頬を染める番だった。